

# 聖書宣教会通信

〒205-0017 東京都羽村市羽西2-9-3 Tel 042(554)1710 Fax 042(554)5562 振替・00150-6-34971

## 巻頭言

### 「教会の主仕える」

聖書宣教会責任役員 清水昭三  
福音交友会高石聖書教会牧師



40年前になりますが、聖書神学舎卒業後ゼロからの開拓伝道に導かれ、トラクト配布から働きを開始しました。1週間のほとんどを用いて、市内23,000戸の家庭の一つひとつを何回も訪問しました。なかなか人が来てくださらない中で、日曜日には、初めて来られる方々のために、どんなメッセージをすればいいのかと随分苦労しました。伝道メッセージを毎週準備することは苦闘の連続でした。神学舎で学んだことのないことばかりでした。舟喜順一先生から「卒業後もギリシャ語で聖書を読む努力をしますか」と念を押されていましたので、ギリシャ語やヘブル語の聖書は手の届きやすいところに置いていましたが、ゆっくりと手にすることは容易ではありませんでした。トラクト配布以外に伝道集会をしなければ新しい人は来てくたさいません。貸し会場の掃除、イス並べ、当日の司会、メッセージ、後かたづけなどを家内と二人で何回行ったのでしょうか。また、地域の子供たちをどのように救いに導くか、中学生、高校生たちとどのようにして友だちになるかなど、神学校での学びとは異なる必要が次々出て来ました。神学舎でのノートは積んだままにして、夢中になって子供たちと遊び、中学生たちと野球やサッカーをしました。幾らかの群が出来ると、生活の相談相手、信仰の指導、結婚のお世話、教会の経済の心配、会堂取得、誕生から召天までと多彩なプログラムと群のお世話が日常的となりました。

これでいいのだろうかとの葛藤もありましたが、牧師として召されたのだから教会に仕えることを最優先にするのは当然と牧会と伝道に明け暮れて来ました。40年の間には、日本の教会にも様々な波風が吹きました。聖書神学舎は聖書宣教会という宗教法人格を得ました。新改訳聖書も第3版となりました。神学舎の先生方も様々な道をたどられました。そのような中で、

召された者として牧師の働きを継続出来たことを感謝しております。こんな者の歩みが守られたのは、神学舎での学びが土台となっているからであると感謝しております。

牧師は誰でも、どんなに忙しくても、主の前に静まり、聖書を読まなければ何も出来ません。聖書を開くごとに、聖書神学舎で、聖書論を繰り返して繰り返して、心に刻み込むようにして教育されて来たことが思い起こされました。当然のように牧会の中では聖書を教えることを主眼とし、聖書66巻のほとんどを教会で教えました。神学舎でのノートを元に、信徒向けテキストも幾つか出来ました。ギリシャ語とヘブル語の聖書は、ずっと一番手の届き易いところに置いて来ました。「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です」エペソ2:20。「どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです」第Iコリント3:10,11。

神学校は牧師生涯の土台作りの場、神学生は土台固めに全力を尽くす必要があります。やがて、多忙な牧師になっても土台が崩れないように、神学生のうちに土台を強固しておくことです。そして牧師に就任してからは、教会が必要とする諸事雑事をいとわないうでなしていくことです。それは、なんとかして、聖書に根ざした教会が建て上げられて行くためです。教会の主が、50周年を迎えた聖書宣教会を今後も用いて、その働き人を訓練して下さり、世に送り出してくださいよう、切にお祈りいたします。

## 「モリヤ問題」報告

聖書宣教会会長 鞭木 由行

いつも聖書宣教会のために祈り、支えてくださいますことを心から感謝いたします。聖書宣教会通信124号で公表した財政上の損失に関して、責任役員会より最終的な報告書が出されましたので、ここにその要旨を報告いたします。貸付額7000万円の約三分の一はモリヤ（株）の関係者によって弁済され、約三分の一は旧新の責任役員弁済と献金によって補填され、最後の三分の一は諸教会及び個人からの献金によって回復されました。その結果、910万円が未回収に終わりました。この損失についてもなお回復の余地がありますが、私たちはここで一区切りをつけ、以後は一般会計で処理することに致しました。未回収に終わった残額については、諸教会に深くお詫びする次第です。それにしても、このような困難な時に諸教会が痛みを共有し、回復のための献金によって私たちを支えてくださったことは、私たちにとって大きな励ましとなりました。

私たちは、この問題を単なる財政上の過ちと理解しているわけではありません。この度の経験を通して、もう一度、主を恐れ、主に信頼して歩むという神学校運営の原点を確認し、聖書宣教会が建てられた本来の目的と使命を再確認しています。ま

た、これまでの反省を踏まえて運営面での改善とカリキュラムの改訂にあたってきました。2009年度から新しい体制で再出発すべく作業を継続中です。

それにしても「モリヤ問題」が聖書宣教会に残した傷跡は甚大でした。2005年春にこの問題を公表して以来約三年余、聖書宣教会は、自らの招いた事態とはいえ、嵐に飲み込まれたような状況になりました。創立以来築き上げられてきた信用は失われ、閉舎も覚悟しなければならないと思うときもありました。学内においては、時に授業をつぶして教師と研修生がこの問題をとともに考え、祈り合いました。この問題を巡る関係者の反応も様々でした。私たちキリスト者にとっても、責任を取るという生き方がいかに困難であるかを痛感しています。

聖書神学舎は今年50周年を迎えます。その歴史の中でこれは特筆すべき出来事でありました。その最終的評価にはもう少し時間が必要ですが、この問題と対峙することを避けて今後の聖書宣教会の歩みを論じることがありえないように思います。この問題の最終報告を経て、今、私たちはようやく次の目標に目を向ける準備ができたように思います。引き続き聖書宣教会の歩みのためにお祈りください。

## 2009年度からの、新しいカリキュラムの特徴

教師会は、2009年度からの新体制の発足にむけて、数年間カリキュラムの検討を重ねてきました。ここ10年の歩みを振り返りながら、また、創立50周年を迎えるに当たって、聖書神学舎の原点がどこにあるのかを確認する時を与えられました。そして「聖書宣教会が最初から目指してきた『聖書に聞く』という教育を中心に据え、増大傾向にあった実践的科目が本来の聖書の学びを圧迫しないように整理しました。」

それは、私たちもいつのまにか「ゆとり」と「実利」を強調する時代の流れに流され、聖書と神学の単位がかなり減っていたことに気付かせられたからです。「聖書信仰」が単なるお題目となっただけではなかったか、聖書の権威を真に信じて、「聖書力」を身に付けてきたかどうか、という反省からも来ています。私たちが真に拠り頼むべきものは、神の恵み以外にはないことを確かめつつ、人が変わり、世が移っても、すべての土台である「みことば」に聞き続けることが何よりも大切であると再確認させていただきました。

アイルランドのリバイバルの説教者トーマス・ウォルシュは、28歳の若さで主のみもとに召された時、聖書を原文（ヘブル語・ギリシャ語）で知り尽くしていたとジョン・ウェスレーは伝えています。ある人がウォルシュに質問をすると、それに関連することばが聖書の中に原語で何回出てくるのか、どういう意味であるのかを答えることが出来たというのです。みことばに仕える説教者として、少なからずのチャレンジを感じないでしょうか。「主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。」（詩篇1:2）ことを、実践し、みことばに仕えて行きたいと思わされます。

## 舟喜信先生をしのぶ会

去る7月7日（月）の午後のひととき、同窓

生を中心として約150名が集い、創立以来奉仕をされた「教師としての舟喜信先生」をしので、聖書神学舎教師会主催の記念会が持たれました。「大きな宿題」を残して行かれた先生に対して、卒業生の中にも様々な思いがあったことと思います。

そのような中で、舟喜信先生の「教師としてのあしあと」を辿りながら、50年間の聖書神学舎の歩んできた歴史と先生の歩みとを重ね合わせ、その時期、その時期に、主が先生を「みこころ」にしたがってお用いになったのだということを確認する時でありました。人のなす業には限界があり、欠けがあり、時には痛みが伴うと共に、「にもかかわらず」の恵みの神は、「あわれみの見本として」先生をお用いになられたのだと信じ、列席者一同、主のあわれみが尽きることがないことを再確認させていただきました。先生の愛された聖歌「カルバリ山の十字架につきて」を共に賛美しながら、そこに臨在される贖い主キリストの十字架が「わがため」であったことを覚え、心からなる感謝を主にお捧げしたことでした。私たち信仰者の原点を確認させていただいた恵みのひとときでありました。

## 夏期研修講座

奥多摩福音の家で57名の参加者を与えられ、昨年に引き続いて「釈義から説教へ—その2：『祈り』」というテーマで行われました。「祈り」に関する聖書箇所を旧約・新約から三つずつ選んで、まず担当教師が説教をしてから、その説教箇所の原典の釈義をするという順序で行われました。ヘブル語・ギリシャ語の原典から教えられたことがどのように説教に具体化されるのかを共に学びましたが、説教者自らがみことばによく教えられ、みことばの権威の下に生かされていることが大切であることも確認させていただきました。

## 教会音楽夏期講習会

今年は25名が参加しました。昨年に続いて、「みことばと賛美」がテーマでしたが、特にローマ人への手紙8章から「イエス、わが喜び」についての聖書の学びと教会音楽の実習が行われました。宣教会ならではの教会音楽教育の継続の大切さを改めて認識させられる数日間の講習会であったと思います。

## キャラバン伝道

三チームに分かれて群馬県、岐阜県、宮崎県の三つの教会に遣わされて行きました。それぞ

れの主の教会の置かれた現場で、大変貴重な訓練とお交わりの時が与えられました。（詳しくは、以下の報告をご覧ください。）

夏の諸活動も終わり、来春卒業予定の研修生たちは、いよいよ卒論と卒業後の進路のことで主の助けと導きを必要としています。来年度、入会を祈っている方々には更なる召しの確信が与えられて具体的に備えることが出来るように、お祈りください。新しい教師、講師が主によって備えられるようにも、引き続きお祈りくださるようお願いいたします。

## 2008 年度夏期伝道実習から

暑い夏！熱い夏！福音宣教の種まきのため、3チーム12人が遣わされた。主が私たちの小さな業をささえ、大きな御業をなされた。私たちはその目撃証人である。教会に、そこに集う人々に、地域の方々に、子どもたちに、そして私たち自身に、主が働きかけ、大きな祝福を与えてくださった。教会ごとの取り組みや課題から考えさせられたこと、準備や実施における経験、また示された自分たち自身の弱さや足りなさなども、それぞれが私たちにとっての大きな糧となっている。何よりも、多くの方々の祈りが感じられる一日一日であった。偉大な主をたたえて感謝すると共に、お世話になった先生方や教会の皆様、お祈りくださった皆様にも心から感謝するものである。

キャラバン委員長 滝野賀代

## 大間々キリスト教会（群馬県）

日程：7月12日～20日

松田聖一、滝野賀代、老松望、和田孝之

私たちは、中高生伝道を軸に、礼拝や集会での奉仕（あかし・説教）、トラクト配布などの奉仕を行いました。特に中高生伝道に関しては、新来会者向けと今教会にいるユースに向けての二つの集会を企画・実行しました。しかし集会初日、開始時間になっても誰も来ません。「もしかしたら来ないかもしれない。これが伝道の厳しさなのか」と思われると同時に、この状況を心から主に委ねて祈ることを経験しました。その中で私たちは主の働きを見るのです。開始時間より40分遅れでしたが、初めて来会する子を含めたユースの子たちが教会に来たのです。主への感謝、驚きや喜びを隠せませんでした。

こうして感謝のうちに二回の集会を終えることができました。私たちはきっとこのようなことを繰り返し経験していくのだということを主から教えられたように思います。すぐに結果は出なくても、種まく伝道がいつか実を結ぶことを願わされたキャラバンでした。（松田）





かいづ

## 海津キリスト教会（岐阜県）

日程 7月19日～28日

いひよな

李賢娥、伊東勝哉、児玉武志、佐藤陽一

7月19日から28日まで、岐阜県にある海津キリスト教会で奉仕をさせていただきました。チームの4人とも海津は初めてで、少し不安もありましたが、祈り合い、励まし合っていくうちに平安が与えられ、心を合わせて準備することができました。



教会ではチームを配慮し、さまざまな奉仕に触れる機会を計画してくださいました。早天祈祷会で祈りの重要さを覚えつつ一日を始め、教団キャンプ場の整備、聖書学び会、家庭集会、訪問伝道、子育て会、教会学校、日曜礼拝、子ども会などでたくさんの奉仕をさせていただきました。特に、子育て会や訪問伝道を通して教会が社会の中に出て行かなければならないこと、また、神様を信頼して人々のそれぞれの状況を認め、歩んで行くことを考えさせられました。キャラバン伝道の全体を導いてくださった神様、祈ってくださった方々に心から感謝し、これからも海津キリスト教会のために祈っていきたいと思います。（李）

## えびの聖書教会（宮崎県）

日程 7月26日～8月5日

森下信義、加藤秀典、濱川昌彦  
ブラッシュ・リチャード

私たちのキャラバンは、帯山（おびやま）聖書教会（熊本県）での主日礼拝における賛美やあかし、みことばの取り次ぎから始まりました。次の日からは、ともしび聖書キャンプ場（熊本県）における2泊3日の小学生キャンプが始まり、子どもたちと寝食を共にし、イエス・キリストを伝えました。最終日のキャンプファイヤーでは、毎年キャンプだけは参加しているという男の子が、更にイエス様を知りたいとあかしをしてくれたことが印象に残り、55回という歴史あるキャンプの重さを実感しました。えびの聖書教会（宮崎県）での子ども伝道集会では、今まで兄弟姉妹が長く祈り求めてきた近隣の子どもたちが、主の恵みにより教会に集められた姿を見させていただき、感動しました。また、何よりも山間の少人数の教会で、困難にあってもキリストに堅く立ち続けている信仰者の姿に励まされました。和解の務めの苦難と喜びを味わった幸いな11日間でした。（森下）



聖書宣教のために祈ってくださる皆さまに心から感謝しています。  
近況と祈りの課題をお届けします。

- 厳しい暑さの夏でした。皆さまのうえにも、主の守りが確かであったことを信じます。
- 9月になり、学びを再開しています。霊肉ともに整えられた姿で、主のわざに連なっていくことができますよう、研修生、教職員のために続けてお祈りください。
- エヴァンゲリウム・カントライ主催の「岳藤豪希追悼一周年演奏会」が、9月27日に聖書宣教教会で行われます。同封の案内をご参照ください。
- 賛美礼拝が、「賛美と告白」をテーマに、11月8日に持たれます。すべての備えのために。
- 2009年度からの新体制に向けて、主の備えに感謝しています。主があがめられますように。

# 聖書神学舎50周年を感謝して

常任顧問 羽鳥 明

羽鳥明、舟喜順一の両者は、東京神学塾の経営の行き詰まりをきっかけとして、自ら、独自の、聖書信仰に立ち、福音的諸教会に支えられ、これらの教会のために仕えるグラデュエイトレベルの神学校を建設することを発意し、主の導きのままに、その実現にとりかかりました。

結果、聖書神学舎ができ、50年来用いられてきましたことを、主に感謝するとともに、多くの同労の皆さまの御助けをありがたく感謝します。

振りかえりますと、それぞれの時代に、それぞれの恵みがありました。

## (1) 久我山時代 (1958)

久我山の地に、二階建の家屋を、一年30万円の家賃で借りて、聖書神学舎を開校。学生13名。講師舟喜順一、舟喜信、島田福

安、後藤茂光、羽鳥明ら。

## (2) 浜田山時代 (1959～)

ホーク師の世話により、浜田山の地で学校建設。羽鳥師の母堂、ウィルバースミス師の援助による。

## (3) 羽村時代 (1989～)

小作の原野地に600余坪の土地を得て、校舎その他を建設。今に至る。以前に得てきた土地を杉並区に売却して費用を得た。

良き教師に恵まれ、選びの器である多くの研修生を与えられ、いままで大きな貢献ができましたこと、ひとえに神の恵み、多くの兄弟のおとりなし、御助けのおかげと、心より、厚く、感謝申し上げます。

常任顧問舟喜順一、羽鳥明、同じく教師一同より、心より御礼申し上げます。

「聖書神学舎50周年記念礼拝」が、10月17日(金)午後2時からもたれます。元教師会議長の後藤茂光先生が説教をさせていただきます。

## 「オープンデイ」のお知らせ

### 11月22日(土)

(時間割は右の表)

4月に続き、今年度は11月にもオープンデイを設けることになりました。日ごろから聖書宣教会のために祈ってくださっている方々や、将来の学びの導きを祈っている方々にとって、神学校での授業を体験できるひとときです。チャペルでの礼拝とともに、主にある良き交わりの時となっています。申込は不要です。ぜひ一度お出かけください。

	I ~ II (8:20~10:00)		(10:05~10:35)	III ~ IV (10:50~12:30)	
1年	ギリシャ語 (横山昌英)	賛美歌学 (飯島千雅子)	チャペル  (久利英二)	ヘブル語 (松本任弘)	教会音楽 (岳藤照子)
2年	組織神学IV(キリスト論) (遠藤勝信)			旧約釈義 I (鞭木由行)	
3年	牧会学IV (小野寺の諸問題) (赤坂 泉)	宣教学II (異教・異端) (赤坂 泉)		聖書解釈学 (津村俊夫)	
4年	旧約研究 IV (津村俊夫)			新約研究 II (使徒の働き) (久利英二)	

(上記内容については、当日変更となる場合もあります。)

## 編集後記

二つの指定献金によって、教室とフェローシップルームとに計6台のエアコンが設置されました。こうした出来事にも、背後の祈りを知らされて大いに主に

感謝です。他方で、主の教会にある混乱の現実を聞くときに、私たちもなお熱心に祈るべきことを教えられる思いです。主の御名があがめられますように。(A)